

序に代えて = = = 猪・鹿・狸より

大正一四年の初夏の頃であるから、あたかもこの本が初めて世に出た前年であった。私は羽後の飛島を訪うた帰りに、同じ国の由利郡矢島の町に引き合わせて、故老たちから山の獣の話を聴いていた。そこへ入るのに、海岸線の金浦（このうら）からじかに山道を選んで、狼も出たと言う広漠とした冬師（とうし）の原を横切っただけに、耳にする話がひとしお身に沁みる心地がした。矢島は旧生駒家の城下で、子吉川（こよしがわ）を溯って鳥海山の東北麓一帯を占める笹子（じねご）村、直根（ひたね）村等の、山の産物であるぜんまい、竹の子、茸等の集散地で、同時に山の獣の話の吹きだまりでもあった。そんなわけで、話を聴いた後に、笹子から直根村の百宅（ももやけ）の部落までも尋ねて廻ったものである。

そこで山の獣の話を聴いていて、東海の山村に育った私の耳に異様に感じたのは、狼（山犬）や熊、鹿、羚羊の話がさかんに出るのに、猪の話というものが、さらに出てこないことであった。日本の山の獣といえ、狼はもちろん熊、鹿、猿、羚羊等もあるが、猪は他の獣類に較べて遥かに多いとひそかにきめていただけに不思議でならなかった。そこで試しに話の間を見て話題を猪に向けてみたものである。ところがそれを聞いた一座の人々はけろりとしている。而して正直そうな一人が、この辺りでは猪というものの出た話はずいぞ聞かぬ・・・昔はいたかも知れぬが・・・と案外な口振りであった。実はその折から気づいたのであるが、こればかりはどこにもいるときめていた猪が、東北地方には分布が少なかったらしい。このことは東海の暖地に育った私の大きな錯誤であった。そうして将来日本のけもの風土記でもできるとしたら、特筆せらるべき問題であろうも知れぬ。

動物分布の上からいうと、寒地の青森県に椿島があるように、適地を求めて彼らも棲んだのであろうから、思いがけぬ場所に本拠があったかも知れない。しかし地理的に見ると、どうやら常陸の八溝（やみぞ）山あたりを一つの境目にして、その足跡はいたって少なかったように思われる。

福島県の南会津や新潟県の山地でも、狩りの目標になるのは、鹿でなくば熊、羚羊、それに猿などで、猪ももちろん雪の中を走るが、いずれかというところ、その性質からであろう、陽当りのよい疎林や萱立ちの場所を好む。陸前本吉郡の海岸寄りなどは地理的には遥かに北に寄ってはいるが、そうした条件から出没があったものと考えられる。それに引きかえ鳥海山麓などにも所々残っている山毛櫨（ぶな）の大密林といったような所は、あまり好まなかったらしい。

猪に較べると鹿の分布は案外に汎かったようである。現在を標準にしても南の島の宮古列島から、さらに奥羽、北海道にも及んでいる。鹿はどこか貴族的

な感じで、その生活力は猪に較べて一段劣るかと思われるが、大密林にもまた雪の中にも自在に生活を求めている。その鹿が次第に影を匿して、今ではまったく棲息しない地方が多いのは、要するに人間が捕りつくしたに過ぎない。この点で猪の場合とは少しばかり事情がちがうかと思われる。事実常陸の八溝一帯の地域でも、今はもうどちらも少なくはなったが、猪よりは数において遙かに鹿の方が多かったらしい。

今でも水戸市や太田の町などには、八溝山麓の人々は悉く狩りを渡世にでもするかの如く思っている人が少なくないが、それはもう四、五〇年も前の話であった。しかし話だけはどうやら聴くことができる。而してそこに出て来るのはやはり鹿であった。冬が来て下野的那須の高原地が雪で埋まる頃になると、八溝一帯の山地へ移動してきたものである。鹿や熊は穴熊のように冬籠りをやらぬ動物だけに、雪を必ずしも厭うわけではないが、地続きに暖地があれば、そこを求めて移動もやったらしい。ことにあの見事な肢を持ち、つねに群れを成していたことも、一面には移動するための必要性であったかも知れない。

常陸の八溝山（実は磐城、下野の三国に跨る）の麓にも、私が昭和元年の秋に訪れた時には、狩人はもう幾人も残ってはいなかった。黒沢村（久慈郡）町附（まちつき）〔現、大子町〕に一泊して、翌日字中郷に狩人の一人を尋ねて行ったが、屋敷の入口に直径4尺もあろう大木を輪切りにした門柱があるのに、まず、度肝を抜かれた。中から出て来たのが、これまた見上げるような巨大漢で、一目見た瞬間、アイヌと頭に閃いたほど、瞳が落ち込んで顔中が髯に埋まっていた。その翁の話しぶりが今も眼に瞭然と残っている。以前は熊もたくさんいたが、今はそれを物語る何一つの証拠もない。しかし、これからお前が行って見ようとする福島県東白川郡にはいれば、何を措いても喬木（たかき）村の伊香（いこう）を尋ねて見よ、今ではもうないかも知れぬが、あそこの諏訪神社では、祭りのたびに熊の頭を供えたもので、その白骨が神社の前の某の家に累々と積んであったと語ってくれた。

この翁に別れてから、私はさらに字上郷（かみさと）磯神（いそがみ）の部落に狩人を訪うたものであったが、やはり狩りの対象は熊でなくば鹿で、猪の話はいたって少なかった。しかし猪も必ずしも獲らないわけではなく、その人々が狩りの際に穿つ沓が、磯神の狩人の家に吊るしてあったが、これは猪の皮でできている。様式からいって古代服飾の綱抜きに近い。その狩人の話であったが、猪の中には白猪坊（しらいぼう）と言う全身白毛を生じたものもあると老人から聴いたことを語っていた。猪の毛皮で縫った沓は日光の奥の湯元付近の狩人も用いていたようで、どういうものかぶたぐつの名があった。こうした事実から推しても猪があの方所に相当いたことだけは確かである。

西へ進むと猪の話はさずがに多い。伊豆の天城山の御料場は、ついこの間まで狩猟頭たちの功名争いの場所で、山城の雲ヶ畑とともに、年々の新聞記事を賑わしてくれた。獲物の中には鹿もあったが、噂に上るのは猪の方がつねに多かった。その他三河の伊良胡岬をはじめ、近江の伊吹山麓は言わずもがな、伊勢から紀伊にかけても、猪の話は多かった。ことに大和の玉置山は猪鹿除けの御符を出すことで、秩父の三峯神社とともに世に知られている。

渋沢子爵所蔵の『猪狩古秘伝』一卷は、民間の狩りの伝書として珍しいものと思う。年代はいずれ徳川末期であろうが、惜しいことに場所が不明である。しかし、記事から判断して大和から紀伊にかけての古伝を記したことはほぼ誤りがない。中で興味を感じたのは、一度矢玉を負わせたものは、たとえ他領たりとも追い込んで捕るという一条であった。

中国筋でも猪の話は到る所で聞かれる。岡山の山村でも聞いたが、周防、長門等でも今なお旺んに出没があった。もう何年か前になるが、石見那賀郡の温泉に泊まって、一夕土地の故老から猪狩りの話を聞いたことがある。四国でも狩りの話といえばもう猪が賓客であった。

あれから海を越えて九州へ渡れば、猪の話が圧倒的で、鹿の方は極めて影が薄い。しかし、博多の沖の残島（こののしま）では、鹿児島県の馬毛島から移した鹿が近年夥しく繁殖して、開墾地の農作はその被害で成り立たぬとさえ聞いた。島へ行った帰りに、その日に獲たという見事な大鹿と同じ舟に乗ったものであった。しかし、これは一種の人工繁殖であるから例外の部である。

先年福岡に暮らした頃には、豊後の玖珠の町や大野郡の三重（みえ）の町から、町に売っている肉を買って帰ったことも何度かある。南海部郡の因尾（いんび）村は、東国の八溝山麓のように狩人と猪の話が多らしい。獲物は三重の町あたりに捌くという。こうして生きた猪の出没も多かったが、ことにあの地方で聞くのは千匹猪の塚の話であった。

千匹の猪を獲った期を最後に供養のために塚を築いて祭ったというのがそれである。福岡の佐々木滋寛さんの話では、その塚がそちこちにあると聞いたが、私は不注意にして巡り合う機会がなかった。そんなわけで話だけは肥後の五箇の庄でも耳にした。それは仁多尾の村にあると教えられたが、ついにたしかめずにしまった。

同じ類の話は土佐にもあって、そこではもっぱら千匹猪（せんひきい）といい、塚を築くというよりも千匹目にいたって不詳があるという。この種の伝説はかならずしも猪に限るものでない。他の獣の、ことに鹿にもあったかと思われ、その方がむしろ先型らしく、遠江の千頭山（せんずさん）の地名伝説など

はその一例かと思う。

鹿の頭を供えて祭りを行うことは諏訪神社の次第にもあったが、一方狩りを渡世にする者は、諏訪神社へ奉納する風があった。奉納諏訪神社と記した名札をつけて街道ばたに出しておく、通りがかりの馬子などが次々に荷鞍に着けて運んだものという。これは三河の北設楽郡の話であるが、陸奥黒石在の六郷村のししが沢には、何の目的か判らぬがたくさんの鹿の頭が岩に彫ってあると、菅江真澄の紀行には出ている。

千匹猪、千頭の鹿の伝説も、あるいは千という数字に意味があって、例の人間を相手とする千人斬りの譚にも関係があるかと思う。そのいずれにしてもこれが猪狩りに関連して狩人の間に語られていたことには興味がある。そうして猪が旺んに出没しない限り、その伝説も継承さるべくもないのである。九州における夥しい猪の棲息を物語るものに、別に柳田先生の『後狩詞記』がある。該書は日向椎葉村（西臼杵郡）の猪狩りの次第作法を筆録せるものであった。

沖縄では猪はヤマシシという。これは本島の山地ばかりでなく、遥かに八重山列島の石垣島にも棲息している。あそこの万年青岳（おもとだけ）を中心として、あの島における猪の本拠であった。そうしてついこの間も、ヤマシシの被害で農作物の収穫が覚束ないとの訴えを聞いた。ここにも狩りを渡世とする者はいて、これをインビキ（イヌ挽き）ということは、沖縄本島の国頭地方と変りはない。

猪を防ぐ柵をイヌガキといい、捕るには多く鎗を用いる。石垣島で使用する鎗の形式を、亡くなられた岩崎卓爾翁から伺ったことがあった。実物を見たわけではないから、確かなことは言えぬが、それは飛騨大野郡などの山地に伝わるものと多分に共通点がある。

沖縄の猪についての話として、国頭郡国頭村で聴いたことは、今もはっきり記憶にある。ことに前に述べた千匹猪の話に似たことがここにもあった。しかし、ここの話は千匹でなく、百匹であるとも伝えられている。説話者の談では、目的が供養であるか祭りであるか不明であるが、ともかく、たくさんの猪を捕った者が、縁者を招いて振舞いをやった。なにぶん子供の頃ではっきりせぬが、振る舞いと同時に仲間が集まって、旺んに的を射たというから一種の儀式ではあったらしい。

それと似た話を遥かに地を隔てた常陸の山村で聞いている。所は前にも述べた久慈郡黒沢村で、すなわち八溝山の麓である。

あの地方には明治の中期までに俗に百丸（ひやくまる）の願（がん）ということが、もっぱら狩人の間に行われた。これは捕った獲物が百に達した時を境に行うのではなくて、その名称のように、あらかじめ百という数を想定して山の神に願掛けをする。丸（まる）というのは心臓を謂う狩詞で、要するに百の心

臍を神に献るとの誓約であった。そうして現にその願を果たした一人が、つい最近まで生きていたというのも、むしろ不思議の感がある。

今日のように、何事にあれ物質に走って価値や意義を言い立てる時世になると、百丸の願の目的などとかく理解が困難になるが、私が土地の狩人たちから聞いたところでは、現代風に解釈すれば一種の励みで、謂わば自己鞭撻であった。しかし当の本人の心理はかならずしもそうではなかったと思われる。それは明らかに説明は能わぬにしても、一種の誇りというか狩に対する名誉感が働いていたことが想像される。したがってそれは千円の貯金と言うようなものと多分に隔たりはあるが、一面に通ずる点もある。

その間の感情はスポーツなどに索めることがむしろ捷徑である。今では心身の鍛錬などというが、目的や意義を言い立てるからそうした説明をしたままで、当事者の心を駆り立てるものは、どこまでも誇らしい優越感であった。かように解釈すると、八溝山麓の狩人の胸にたぎり立った感情も、どうやら昔の戦場で、斬った首級の数誇る戦士の気持ちにも通うものがある。そうしてまた台湾の番人の首狩りの習俗も思わされる。

前にもちょっと触れた、『猪狩古秘伝』には、狩人の名誉ある者を、壮夫（ますらお）または薩夫（さつお）と呼んだことがある。壮夫はあるいは猿男（ましらおのこ）の訛語であったかも知れぬが、一方薩夫の名の「さつ」は、古語に謂う天の征弓（さつゆみ）の「さつ」、あるいは海の幸山の幸などの「さち」であろう。さつ、さちはただそれだけでは本質が何であるか、まだ明らかではないが、一種の威力旺んな靈威であろうことは、民間伝承の、ことに狩猟者の伝承を通して、想像することができる。天竜川奥地の狩人の社会には、シャチという靈威の存在が伝承されていて、狩りの成果も要するに猟具にシャチの憑依如何で決せられる、シャチ玉といい、シャチ鉄砲等の名がそれであった。何かの動機でシャチが遊離すれば、その物の具はもはや廃具に均しかったことを説明する挿話も段々にある。これらはかつて「参遠山村手記」と題して雑誌『民俗』に報告したから、ここには繰り返さない〔本巻三三三頁〕。このシャチが一方のさつ、さちの語と内容に関連があることは証明し得ることで、決して語音の類似ばかりではなかった。したがってその果敢なるシャチ、サツの靈威を肉体に享け継いでおれば、名誉のものであることは疑いない。千匹猪、千匹鹿の故事については何ら語る資格はないが、八溝山麓の狩詞に謂う百丸の願は少なくとも、そうした名誉感を幽かながら胸中に描いて、そこに達するための作法であったかと思う。

とくに百丸の願などと言わぬまでで、あらかじめ獲物の数を定めて狩場に臨むことは、以前の狩の作法にはありがちのことであつたらしい。『後狩詞記』に

もあって興味ある問題であるが、肥後や日向の狩猟者の間には、獲物を獲るために海のおこぜをもって山の神を誘うことがある。その次第について同書には、狩りに臨む前にあらかじめおこぜを白紙に包み、猪を獲さすればこの世の光を見せ申す可しと誓約し、而して獲物があればさらに一枚の白紙を増し、今一つ与え給わばこの世の光を見せ申さんと、次々に白紙の数を増してゆくという。ところが私などの聴いた話はそれとは逆で、あらかじめ獲物の数を定めてその数ほど白紙を重ねて置き、獲物のあるたびに一枚ずつ剥いでゆく。かくしていよいよ最後の一枚を剥く際には、山の嶺などの清浄な地を選んで、そこにおこぜを放つ。その瞬間鉄砲のような恐ろしい音がするなどと言う。これについて日向鞍岡村（西臼杵郡）でたまたま知った老狩人は、かつて仲間とともにおこぜを手にいれたが、あまり欲張ることも何かしら空おそろしく、殊勝にも五枚の白紙を巻いた。ところがその徴しか、たちまち五頭の猪を獲たので、かねて聞いていたままに、山の嶺で干乾びたおこぜを放したが、その際は格別音の沙汰もなかったと語っていた。

千匹猪、百丸の願などにあるいは関連があることかと思うが、狩の作法の一つとして豊後大野郡の狩人社会では、獲物があるとまず臓腑を割いてその心臓を取り出し、かねて用意の白紙の中央にその心臓すなわち彼らのいわゆるこうざきをもって、赤くまんまるく染める。でき上がったものは、日本ではどこでも見る、例の日の御旗であった。これを串につけ地に挿して祀る。そうしてこのこうざきで染めた旗の翻る所がやがて神の所在で、見方によると一つの塚処でもあった。少しく憶測に過ぐる感はあるが、われわれのつねに仰ぐ日の御旗の趣向なども、かようなところに一つの伝統があったように思う。血を日の神の象徴とすること、血と忌との関係なども、狩人の社会に伝承された事実から説くことは、かならずしも無稽のことではなかったように思う。あるいは十二の染木などと称して、獲物の血をもって串を染め、これを神の標として祀ることを、土佐の本川村（土佐郡）の狩人たちは行っていた。

いわゆる狩猟ではないが、対馬の陶山庄右衛門によって企てられた猪狩りは、近世のわが国のおける猪の歴史を通じて、比類なき残虐であった。元禄十三年〔一七〇〇年〕に着手して前後九ヵ年の歳月を費やし、捕った猪の数は八万数千頭に達した。しかも全島の人口は当時三万二千というから、ほぼ三倍近い猪の数であった。これでは一大決戦を試みぬ限り人間の命が危なかったであろう。そんなわけで『猪鹿追詰覚書』の中の、神主に読ませる書付の案に、

猪鹿年々作毛を害ひ、人民の食物を減らしー

猪鹿の防に力費えて農業疎かなり、郡中に可[^]生程の穀物を生じ得ざる事、
神の知り玉へる所なればー

とあるのもむしろ悲痛である。しかしこれを猪の立場から言えば、一大災厄で、同時に最後を飾る悪夢であった。それから僅々九ヵ年の間に、朝鮮の牧の島（絶景島）に特別の憐愍をもって放たれた若い一つがいを残すだけで、他は悉く亡ぼしつくされたのである。

対馬の猪は人間どもの挑戦にあって忽ちに亡びたが、実は人間の生活権の拡張に伴って徐々に亡び去った猪はけだし夥しいものであったろう。これは他の鹿、熊、狼にもまた言い得ることであった。人間の立場から言えば、同じく生きるためであるからやみがたい処置でもあったが、さて相手の数がにわかになくなってみると、好敵手に去られた勇士のように、そこに一抹の無聊を感じざるを得ない。そうして少しずつ、仲間を喰いつくして、最後にわれ一人が取り残された佗しさもないではない。憎しといい恨むというのもむしろ親愛の表現で、事実われわれと動物との関係には、そういうところが多分にある。陶山庄右衛門が一つがいを朝鮮の孤島に放したのも、清盛が源家の遺孤を蛭ガ島に見遁した故事にも通じる。そうしてみんな寂しかったのである。

われわれの歴史には、先住民族としての熊襲や、佐伯、八束脛、蝦夷等との争闘対立が常にくり返されたことを挙げているが、動物との交渉についてはほとんど記すところがないが、繁雑にくり返されていたことだけは想像に難くない。それらは今に残る狩りの作法を通じてもわずかに肯かれる。

狩場の還りは武士で言えば、まさに凱旋の鼓舞であった。それで九州の阿蘇や五箇庄の狩人たちも、獲物があればまず法螺を吹き鳴らして合図をし、山の神への歌を一同で合唱しつつ山を降った。その声を聞いて、山口まで女子供までが迎えに出た。ほんとの坂迎えである。また南会津の桧枝岐（ひのえまた）等では、獲物を胴締めと称して曲物の桶胴を臍腑を抜いた獲物に入れて生けるが如き姿とし、これを若者が負って村人の出迎えの中を行進した。その行列の中には前の狩りに獲た初矢（しょや）の誉れの巾着を腰の辺りに見せているものもあった。話を聞いただけでも光景が眼に浮かぶようである。

あるいは、また、獲物の上顎骨〔下顎骨〕を飾っておく風も、前に挙げた福島県の伊香だけでなかった。肥後の五箇庄の平盛〔春永〕氏の家には、座敷の長押に猪の上顎〔下顎〕が数にしてほぼ二〇〇あまり、ずらりと並べて飾ってあった。惜しいことに家が火災にかかって、悉く失ってしまった。どういふものか、野猪の上顎骨〔下顎骨〕は、沖縄の狩人（いんびき）たちも大切にしておいて家の門に飾る風があった。中部日本などで、山犬すなわち狼の上顎〔下顎〕を魔除けとして腰に下げた等も、同じ縁に繋がる風習であろうも知れぬ。

この国土から動物たちがにわかにならなくなったことに対して、動物学者の中には、彼らの社会に強烈な疫病が流行した結果と説いた人もあるそうだ。明治三

〇年前後などと、見て来たような説も樹てられたが、実はちょうどその頃が、われわれ民族の文化が一大転機にあつて、昔ながらの生活伝統が、あたかも伝染病に斃れるように、次々に亡びつつある期であつた。動物も亡びたであろうが、動物との交渉もまたにわかに忘れられたことも否みがたい。

民間の説話の中にも、動物学者と節を合せるようなものがあつた。たとえば陸中の遠野地方では、あの地方の御犬(おいん)すなわち狼が、幾百頭となく、群れて山の岨を過ぎていった。そのこと以来にわかに影が淡くなったという。小学校がえりの子供たちが、山の岨を通りながら気づくと、前から見ると犢ほどもあり、後ろに廻れば痩せた犬のような恰好をした獣が、前肢を立て、頭を心持下げて座っている。

そうして時折頭を下から持ち上げるようにして吠える。それがあたかも林の後の切株を見るように山肌一面に立っていた。その期を境に急にあの獣の姿を見なくなったという。これと同じような話は他地方にもある。

また、アイヌの伝説では、鹿のいなくなった理由として、彼らが遙かに海を渡って本土に移って行った。先頭の鹿の尻の部分に次の鹿が頸を乗せて、後から後から、数珠のように繋がって海を踏えたというのである。

話の型は少しくちがうが、肥後の五箇庄〔八代郡〕などにも、ここ数十年前までは夥しい猪や狼がいた。日向との境に聳えた内大臣山の山続きには、それらが群を成していた。狩人たちが気づくと、猪の群を遠巻きにして一群の狼がいる。それはあたかも海で鰯の大群を囲んだ鯉の群れのように、機を測っては外側から蚕食している。猪の中には真っ黒い毛を持ったもの、または白と黒の斑毛のもの、全身が白毛に包まれたものもいた。そうして山から山を幾日もかかって移動していた。あの夥しい猪の群れは全体どこに落ちて行ったものか、狼は……。それが不思議でならないと、見た人たちが語つたという。これは久連子村の平盛春永さんから聞いたが、同氏の父上は、五箇庄きつての狩りの名うてで、しかもその猪の群れを実見した一人であるという。

こうしてたくさんにいた獣たちが、にわかに姿を消したことについては、伝染病説でなくば、アイヌ民族の伝説にあるように、数珠のように繋がって、遙かに海を渡って、どこともなく去つたと説明する他なかつたかも知れない。しかし私などの想像するところでは、悪疫の流行もあつたろうが、やはり人間たちが、つぎつぎに捕つては亡ぼしてしまつたように思う。この点多産の猪はそうでもないが、一年に一頭しか生まれぬ鹿の方は、たちまち姿を匿したことは想像に余りある。それと同時に、夥しくいたというのも、はたしてどこまで根拠があるかわからないのである。いずれにしても、この国土から獣たちが姿を匿したことは、一抹の寂しさを感じずにはいられない。人間の知識ばかりが

いたずらに高くなつては、もう共にあることはできない。遠く袂を別って去ってしまったのも、どうすることもできぬ時の変遷であった。

私がここにものした三河の豊川上流の獣の話も実はその間の過程を語る一挿話で、見方によると彼らの最後の姿であった。あるいは足跡というか、それとも余香というか、否それにも増して幽かなもので、そうしてもう永久に還らぬであろう後の語り草に過ぎなかった。